

## 第 89 回麻布獣医学会 一般演題 3

## ニホンマムシ咬症が疑われた犬の 1 例

千葉 明<sup>1</sup>, 加藤 なつ紀<sup>2</sup>, 伊藤 哲郎<sup>3</sup>, 土屋 亮<sup>4</sup><sup>1</sup> 麻布大学附属動物病院, <sup>2</sup> イオン動物病院日の出,  
<sup>3</sup> 麻布大学附属動物病院小動物臨床研究室, <sup>4</sup> 麻布大学内科学第二研究室

【はじめに】犬の毒蛇咬症は多くの場合に咬まれた蛇が確認できないため、牙痕と臨床症状に基づいて診断されている。本州にはニホンマムシとヤマカガシの 2 種の毒蛇が生息するが、犬の報告例は全て針で刺したような 1-2 か所の特徴的牙痕を中心に周囲組織の重度腫脹が認められたことからニホンマムシ咬症と推定されている（ヤマカガシは後牙類であるため明瞭な牙痕が乏しく、腫脹を伴わない出血傾向を示す）。山間部などの常在地では夏から秋にかけて散発的発生が認められているが、犬に対する有効な治療法が明らかではないため医学領域の治療指針を参考として治療が実施されている。今回、我々は特徴的牙痕と臨床症状からニホンマムシ咬症を疑う犬の一例に遭遇し、治療を行ったので概要を報告する。

【症例】症例は 7 歳齢、去勢雄、屋外飼育の雑種犬であった。夕方に飼い主が外出から帰宅した際に出血を伴う鼻鏡の小刺創と口吻全域の軽度腫脹に気づき、紹介動物病院を受診した。虫刺傷または外傷を疑い対症治療が施されたが、第 2-3 病日にかけて急速な口吻腫脹の増悪、範囲拡大を認めたため麻布大学附属動物病院内科に紹介された。本学初診時（第 3 病日）は右鼻鏡口唇側外側部に化膿、出血を伴う約 3mm の牙痕と考えられる刺創 1 か所が存在した。口吻周囲長は正常の 2 倍程度に著しく腫脹して熱感、疼痛を認めた。腫

脹範囲は頭部全域に及んでおり、口唇粘膜の広範囲に紫斑、点状出血が存在した。食欲は低下していたが、活動性は正常で神経学的異常所見も認められなかった。牙痕形状と受傷部周囲の広範な著しい腫脹からニホンマムシ咬症を疑った。血液検査、血清化学検査および血液凝固系検査に著変は認められなかった。

【治療経過】静脈輸液、抗生剤、プレドニゾロン、H1 拮抗剤、鎮痛剤、抗凝固剤による対症治療を行い、経過観察した。顔面腫脹と粘膜紫斑は第 5 病日より著減し、第 8 病日には鼻鏡牙痕の肉芽形成を除き身体所見に異常は認められなくなったため治療を終了した。

【考察】マムシ毒素には出血因子および著しい浮腫を示すエンドペプチダーゼが含まれており、通常は咬症 2-3 日後をピークとする受傷部周囲の広範な腫脹、出血壊死が生じる。犬の治療報告では受傷後早期にプレドニゾロンを主体とした対症治療を開始することの有効性が示唆されており、今回の症例でも同様の結果が得られた。医学領域ではウマ由来マムシ抗毒素血清については過敏症、血清病を考慮して重症例に限定した使用が推奨される傾向にある。犬でも溶血を伴う全身症状を示した例、死亡例がわずかに報告されていることから、重度全身症状が認められた場合は抗毒素血清の使用を検討する必要があると考えられた。